

『六代勝事記』の周辺と藤原定家

はじめに——『平家物語』成立から『六代勝事記』作者へ——

尾崎 勇

現在の京都市西京区大原野の山陵に三鈷寺がある。慈円在世の往時では往生院と称されていた。執政の「臣」として廟堂を領導していた甥の九条良経の頓死と兄の九条兼実が引き続いて寂したこともあり、洛西西山の中腹に位置している往生院の院主であった慈円は閑雅な西山の空間へ引き籠る。その空間で、有縁の人材を呼集して原『平家物語』の『治承物語』を創出させた。承元四年（一二一〇）から建保末年（一二一九）頃であった。慈円圈の内実である。良経の娘の立子から生誕した懐成親王が建保六年（一二二八）十一月二十六日に立坊（皇太子になる）し、承久元年（一二二九）六月二十五日には良経の嫡男の道家の子である頼経（三寅）が四代鎌倉將軍継嗣となる。承久三年（一二三二）四月二十日、懐成親王は八十五代仲恭天皇として即位、道家が摂政に就く。二つの慶事を見据え、末代の道理と揚言するために『治承物語』を取用しながら、最初の史論である『愚管抄』を成立させた。^{〔1〕}翌月には承久の乱が勃発して、仲恭天皇から後堀河天皇へ交代してしまった。末代の道理の一つが通らない時局に陥ってしまう。その後、貞永元年（一二三三）十月四日に道家の女の嬪子から生誕した秀仁親王が四条天皇として即位、三男の頼経も嘉禄二年（一二三六）一月二十七日に四代鎌倉將軍の宣下、寛喜二年（一二三〇）十二月九日に結婚して名実とも幕府を領導する。嘉禎三年（一二三七）頃から仁治元年（一二四〇）にかけて道家は、慈円圈に参画していた藤原定家をも氏寺の法性寺に呼び入れ、『愚管抄』をも摂取しながら、『治承物語』を六卷本（延慶本『平

家物語』の祖本)に再編したのであった。これが慈円周辺圏の内実なのであった。⁽²⁾

『愚管抄』成立の二年後の貞応二年(一二三三)五月から翌年の三年十一月頃に第二番目の史論の『六代勝事記』が成立する。『勝事記』(以下、『六代勝事記』を略称)の「序」は、

昔は蓬萊の月にかげをまじへ、今は蓮台の雲に望をかけたる世すて人侍り。応保の聖代に生て、高倉の明時につかまつりしかば、年齢やうやくかたぶきて、六十余廻の星霜をかさね、朝儀しきりにあらたまりて、七代帝王の即位にあへり。六条院の御ときは、いとけなくすぎはべりき。安元の比より貞応の今にいたるまでの事は、夢うつゝともおもひわかぬほどながら、見もし聞もせしこと、さまかえへ衣をそめ、弥陀を念じ極樂をねがふにふた心なくなりし後は、世事すべていとはれ、文筆ながくさしおきてしを、普天かきくもりしゆふだちの神なりにおどろきて、其事のわすれざるはしくばかりをかきあつめ侍。心は権実の教法にあひて、善惡二の果をさとり、和漢の記録をつたへて、治乱二の政をつゝしむ。ゆゑに、いさゝか先生の得失をのこし口、おのづから後生の官学をすゝめむ事、身のためにしてこれをしるさず、世のため民のためにして是を記せり。

(六二〜三ページ)

であるから、応保(一二六一〜六三)の七十六代二条天皇の在位している治世に生誕し、八十代高倉天皇の在位の仁安三年(一二六八)頃から源平の争乱が勃発した治承四年(一一八〇)八月の頼朝の旗揚げ以前に出仕し、施線の「貞応の今にいたるまで」であるからには、六十余歳に綴っているとみなされる。二重施線は抽象的で意味が取り難いので次章でふれるとして、波線部から、高倉天皇から八十六代後堀河天皇在位の貞応年間(一二三三〜二四)頃の世界までに見聞した様々な事象を、出家の身ながら取り上げて描いた。そのような表現主体者像が浮上してくるであらう。

この小論の目的は、藤原摂関家の九条家に仕えている藤原定家が『勝事記』成立に関与していたことを明らかにしようところにある。

(一)『勝事記』作者像について

『勝事記』の前掲した「序」の二重施線の「普天かきくもりしゆふだちの神なりにおどろきて」とは具体的にどのようなことなのか、その解釈を『愚管抄』と『勝事記』の先行研究とからませてみていこう。

承久の乱に接した衝撃をもとに、乱勃発の当時については、『吾妻鏡』承久三年（一二三二）六月十三日条に、

十三日 丙寅 雨降る。（中略）官軍矢石を發つこと雨脚のごとし。

とあつて、さらに翌日の十四日条には、

十四日 丁卯 霽る。雷鳴数聲。

であるので、まず悪天候の事実から作者は文飾したと解釈されている。⁽³⁾『勝事記』構成全体から窺えば、跋文の最末尾は、

六十年よりこの口、好文重士の君まれにして、政道過口にみだるゝたびに、其身あすからず、其心くるしぶゆゑに、一人よろこびあり口、兆民かうぶらむ事をねがふばかり也。
(九八ページ)

との一文で括っているのが、「序」にあつた「六十余廻の星霜をかさね、」と照応させたのであつた。この文を意訳すれば、これまでの六十余歳を回顧すると、現今の治世は、

文を好み、土を重んじる帝王はまれであり、政道が奢り乱れるたびに、その身が安らかではないし、心も苦しめる。

となる以上、『新樂府』（第十二・捕蝗）の「文皇仰天吞一蝗、一人有慶兆民頼」（意味は、天子に喜び、万民にその喜びを蒙ることを願うのみである。）の句に跋文の当該の文章は依拠している。この社会批判や風刺の性格をもつ中国古典籍は、『愚管抄』付録にも「文選・文集・貞観政要コレヲミテ心エン人ノタメニハ」（巻七——三二九ページ）とあり、『勝事記』跋文には、作者自身が「心有人答てはいはく、……」（九六ページ）として、「心有人」（この語彙も『愚管抄』にあり、次の章で後述。）を介して、「海内の財力つきぬれば、天下泰平ならず。」九六ページ）等と悲嘆しながら自問自答で

諫言している。『愚管抄』付録の中間の文章では後鳥羽院に詰めよって諫言したあと、後半の文章に及んでは人材論を開陳する。そこでは「十五バカリハ心アル人皆ナニゴトモワキマヘシラルコト也。コノ五年ガアイダ、コレヲミキクニ、スベテムゲニ世ニ……」(巻七―三五〇ページ)と説きおこし、「閑諍誠ニ堅固ナリ。」(巻七―三五六ページ)と閉塞した時局に悲嘆して、

物ノハテニハ問答シタルガ心ハナグアムナリ。

問、サレバ今ハチカラヲヨバズ、カウテ世ニナヲルマジキカ。

答、分ニハヤスクナホリナム。

(巻七―三五六ページ)

等と以下、さらに六つの自問自答を添えて付録の文章すべてを括っていたのと同趣向である。

さて『勝事記』作者像をめぐって、先行研究を窺っていこう。

弓削繁は「隆忠の経歴は序文の記述と実に合致し、矛盾をきたす点はいさゝかも見受けられないのである。ただ、目下の所、彼には文事に関して格別のものが見出せない。」として、執政の「臣」に就いた藤原基房の嫡男の隆忠(一二六三―一二四五)を提唱した⁽⁴⁾。ただし、施線で隆忠は「文事」方面では特別の事がないとも断っている。他方、高橋貞一は「文筆の才能があつた事が明らかである。以上によりて、筆者は、長方の二子、長兼をその著者に推定するのである。また母は入道信西の女」として、二重施線のように論じていた。弓削は、高橋のその言説を念頭に置いたから施線のように表明したとも憶測されよう。藤原長方(一一三九―一一九二)を父に、圈点を付したように信西(一一〇六―一二五九)すなわち藤原通憲の女を母としている藤原長兼を作者とした⁽⁵⁾。長兼の父である長方は、定家の従兄である(信西の孫の聖覚と定家の法脈と縁戚関係図は後掲)。伊藤敬も、前掲した『勝事記』の「序」の「貞応の今にいたるまで」と、阿波院天皇(順徳天皇)の条に、

建久元年丙寅三月七日、摂政太政大臣良経頓死。後京極殿と申にや。文操人にすぎ、理政民をなで、諸道に浅深をさぐりて浮沈をはかり、万機に補佐して親疎なかりき。(中略)前大僧正慈円、つひに行べき道なれど、一日も二日もうちなやみて、おもふ事をいひつゝ、かゝるべし共かねておもはなくは、よのつねなれば、

なぐさむかたもありぬべし。職事・弁官も道にくらく、文峰・歌苑に主をうしなへるとかきくらし、

秋の夜の風と月との友はみな春の山路に迷ひぬる哉

とよみ給ひければ、

太上天皇

その友のうちにや我を思ふらん恋しき袖の色をみせばや

三六通の羅漢も不免、幻術変化の権現も無遁みちなれども、有為無常の悲き、ことわりすぎてぞ侍りし。

(七六～七ページ)

とある『勝事記』の一節をもとに、

六代勝事記の成立が序に言うように貞応の今とすると、まだ慈円の没年前である。(中略)当代一流の文人政治家良経に仕えた作者が、主人の死をとくに哀悼(中略)長兼の可能性がより大のように思う。⁽⁶⁾

施線で慈円が寂する嘉禄元年(一二三五)九月二十五日以前に成立したとして、長兼作者説を唱えた。久保田淳も「隆忠作者説に対して抱く疑問は、豊富に故事や詩文を踏まえた『六代勝事記』のごとき作品の叙述が果たして隆忠に可能であつたかということである。その点では、長兼はほとんど問題ないであろう。」⁽⁷⁾としている。定家の日録の『明月記』嘉禄三年(一二三三)閏三月七日条に、

前大進兼高朝臣慮はずも来臨。当世に於て適々稽古の人なり。清談自熱に移漏。日入るに及び、^(備前長門の)厳親黄門の長女(未だ嫁せず。両納言の姉)年六十九、猶存命。和漢の才智・公事・故事・家の秘説、^(定兼・長兼)連枝に超過す。

施線に藤原長方と長兼の父子の文才を摘記しているのを配意して、『明月記』全体をもとに、

『六代勝事記』の作者と定家の教養や思考がかなり類似しているらしいことを示唆するものであろう。(中略)『六代勝事記』の作者が誰であるかという問題については、なお保留したい。ただ、それは長兼によつて書かれても、また他ならぬ定家によつて書かれても当然であつたと考える。

と長兼と併せて圈点で定家をも作者の候補者に挙げたのである。この施線と圈点の言辭は興味深い。あらためて(五)の章で作者像を展開しようと思う。ちなみに、施線と圈点とは筆者尾崎が付していることをこわつてお

きたい。

(二)『愚管抄』から『勝事記』へ

九条良経の女の立子から生誕した懐成親王は八十五代仲恭天皇として即位、立子の弟の道家が摂政に就いたので『愚管抄』皇帝年代記に仲恭天皇紀を布置して、最初の史論の『愚管抄』は成立した。その翌々年の貞応二年(一二三三)五月から翌年十一月頃に第二番目の史論の『勝事記』が成立してくる。別帖の後鳥羽天皇の条には、祖父の後白河院の崩御の事象を承けて、院の行実の特色を、

同三年三月十三日二法皇ハ崩御アル。マヘノ年ヨリ御ヤマイアリテ、スコシヨロシクナラセ給ナドキコヘナガラ、大腹水瘡ト云御悩ニテ、御閑眼ノ前日マデ、御足ナドハスクミナガラ、長日護摩御退転ナクヲコナハセヲハシマシケリ。御イミノ間ノ御佛事ナドハチカコロハキカズ、アマリナルマデニゾキコヘケル。大方コノ法皇ハ男ニテヲハシマシ、シ時モ、袈裟ヲタテマリテ護摩ナドサヘヲコナハセ給テ、御出家ノ後ハイヨク御行ニテノミアリケリ。法華経ノ部数ナド、数萬部ノ内ニ二百部ナドニモヲヨビケリ。ツネハ舞・猿楽ヲコノミ、セサセツ、ゾ御覧ジケル。御イモウトノ上西門院モ持経者ニテ、イマスコシハヤクヨマセ給ケレバ、ツネハ読アイマイラセンナド仰ラレケリ。

(巻六——二七八ページ)

『法華経』書写行に精励していたとし、他方では舞楽や猿楽そして今様などを熱愛して「あそび心」を抱く華麗な趣きを呈していたと批評した。すなわち「花やかさ」があったと叙述している。『勝事記』の隠岐院天皇(後鳥羽天皇)の条にも、後白河院の崩御を、

無常の春の風、花のすがたをさそひき。極楽往生はあさ夕の御のぞみ也ければ、臨終正念みだれず。

(七四ページ)

と描いているので、『愚管抄』の施線部から二重施線へ及ぼせるのと全く同質の筆致なのである。『勝事記』は『愚

管抄』を簡約したような文章になっている。

『愚管抄』 皇帝年代記に、

承久二年十月ノ此記^レ之了。後見之人此趣ニテ可^二書統^一也。

(巻二——一二三ページ)

とか、別帖の跋文に相当するところで、

ソノヤウヲ又カキツケツ、心アラン人ハシルシクハヘラルベキ也。

(巻六——三一八ページ)

として、書き継ぐことを慈円は求めた。後者の枠で括った「心アラン人」とは、

『勝事記』に、

① 心有人かくのみなげきあへるほどに、

(八二ページ)

② 心ある人申あひたりし。

(八八ページ)

③ 心有人答ていはく、

(九六ページ)

とやはりあつて、この三例を弓削繁は「韜晦された作者」と解釈した。^[8] さらに、

抑も「心有人」を措定して政治の当為を説く『勝事記』には、一つに慈円の『愚管抄』に答えようとする思いが込められていたのではなからうか。

と推定している。^[9] この弓削の言説は看過できない。確かに『愚管抄』別帖の八十三代土御門天皇の条に於いては、後白河院の霊をめぐる事象を叙述して、その対処を開陳した慈円(第三者の立場に自己を置いている。)を「心アル人ハコレヲカンゼズト云コトナシ。」(巻六——二九三ページ)とあり、表現主体者は慈円であるので自賛したことになっている。八十四代順徳天皇の条にも、

九条殿ノ子二良輔左大臣、日本国古今タグヒナキ学生ニテ、左大臣一ノ上ニテ朝ノ重宝力ナト思タリキ。昔師尹小一条左大臣、一条摂政右大臣ナリケルニ似タル物力ナト、心アル人思ケリ。君モイミジト思食タリキ。

(巻六——三二〇ページ)

と叙述されているし、

又院ハ八月ノコロヲイ、御悩ハヅライヲハシマシ、ニ、「ヨクくシツカニ物ヲ案ズルニ、此忠綱ト云男ヲ、コレヲナドニ殿上人内藏頭マデナシタルヒガコトコソ、イカニ案ズルモ取ドコロモナキヒガコトナリケレト、サトリ思フ也」トテ、ヤガテ解官停任シテ、御領国サナガラメシステラレニケリ。スコシモシモ心アル人々ハ殊勝くノ事カナトヲモヘリケレバニヤ、其悩無為無事ニ御平愈アリケリ。(中略)萬ノ事トリアツメテ忠綱ガウセヌルコト、不力思ギノ君ノ御運、御案ノメデタサト、心アル人ハコレヲノミメダクゾ思タリケル。

(巻六——三二六——一七ページ)

とし、前章(二)に掲出した付録の後半の人材論に「心アル人」(巻七——三五〇ページ)があつたように、右文の施線部にもあるからには、同一の語彙を襲用したのである。

さらに弓削は、『愚管抄』の文章との相似があることにふれながら、

慈円(九条家)とは政治的に近い距離にあるものと考えられる。(中略)『勝事記』の作者の見当を慈円の周辺につけることは、さして無稽な所為でもあるまい。

として、二重施線では『勝事記』作者を慈円周辺に想定している。^[10]さらに、弓削は、

定家の嘆きは直接後鳥羽院へとは向かわないが、彼の心底には院周辺に対して漠然たる不安が存したのではなからうか。『平家物語』は、

当今ハ御遊ニノミ御心ヲ入サセ給テ、世ノ御政ヲモ知セ給ハズ。九条殿御籠居之後ハ卿局ノマヽニテアレバ、人ノ愁歎モ通ラズ。

(延慶本、第六末「卅六」文学被流罪事)

この『平家物語』に描かれている卿局範子・卿二位兼子等の一族によって壟断された政治状況を危惧する声は、当時の知識人の間に伏在していたものであろうと論じてもいる。^[11] 圏点は筆者尾崎が付した。

○

★『平家物語』の圏点「卿局ノマヽニテアレバ」は『愚管抄』別帖の順徳天皇の条に、

京ニハ卿二位ヒシト世ヲトリタリ。女人入眼ノ日本国イヨクマコト也ケリト云ベキニヤ。

(巻六——三〇四ページ)

とみえていることを指し、「女人人眼」とは政治で重要な役割を女人が果たすという政治思想である（拙著『第三部第十一章』（『愚管抄の創成と方法』波古書院・二〇〇四年）。兼子の姉の範子と後鳥羽院とのあいだに為仁親王（土御門天皇）がいた。院政を開始した時局のもとで、『明月記』建仁三年（一二〇三）正月十三日条に、定家は仕えている執政の「臣」の九条良経の権限を侵食しているので、

権門の女房偏へに以て申し云ふ。殿下の御力及ばざるか。

兼子に怯えている。範子の妹であるから『愚管抄』に、

実朝母ハ熊野へ参ラントテ京ニ上リタリケルニ、卿二位タビタビユキテヤウくニ云ツ、

（巻六——三二〇ページ）

とあつて、三代將軍実朝に嫡子が生まれなかつたので、上洛してきた北条政子に自分が養育してきた頼仁親王を実朝の跡継ぎすすめた。

兼子は院の討幕政策にも積極的であつた。

○

弓削の前掲した言説のなかの二重施線「『勝事記』の作者の見当を慈円の周辺」は正鵠を射ていよう。

（三）『愚管抄』の「ウルハシキ」から『勝事記』との相違へ

『愚管抄』皇帝年代記の後堀河天皇紀に、

今年天下有ニ内乱一。コレニヨテ、俄ニ主上執政易、世ノ人迷惑云々。

一院遠流セラレ給フ。隱岐国。七月八日於ニ鳥羽殿一御出家、十三日御下向云々。但ウルハシキヤウニハナ

クテ令ニ首途一給云々。

（巻二——二二五ページ）

施線と二重施線との言辭についてみていこう。まず施線の言辭をめぐって弓削は、

『愚管抄』の「世人迷惑」という文字こそ、心ある『勝事記』の作者にとつて、原・体・験・に・外・な・ら・つ・た・と・思・うのである。^[12]

と解釈した。施線について、久保田淳も『愚管抄』と比較対照しながら、慈光寺本『承久記』を論じて「……「世

人迷惑」の四字には、著者慈円の無量の思いが籠められているのであろう。(中略) 慈光寺本は傍観的にすぎるような気がする。(中略) 極めて楽天的な叙述をもつて満たされているのである。それは『六代勝事記』や古活字本『承久記』の悲愴なまでの慷慨調とは、著しい対照をみせているのである。(中略) 『愚管抄』や『六代勝事記』などの作者の、いわば直線的な承久の乱認識とは明らかに位相を異にしている。……と解釈した。^[13] 弓削は「原体験に外ならつた」とし、久保田の言説も「直線的な承久の乱認識」としており、施線の「世ノ人迷惑云々」を慈円の率直な感慨が露呈したと理解している。『愚管抄』のモチーフが霊告であることに照らして、弓削と久保田との見解には従えない。

『愚管抄』皇帝年代記の仲恭天皇紀に承久三年(二二二)四月二十日、九条良経の女の立子から生誕した懷成親王が仲恭天皇として即位したので良経の嫡子の道家が摂政に就任した事象に「道理必然」の言辭を嵌入して史論を成立させた。それは、すでに九条家の僥倖として四天王寺別当の慈円の許に建保四年(二二六)正月に聖徳太子の霊告として予言されたことが承久三年四月二十日に符合したからであった。『愚管抄』のモチーフは太子の霊告なのであつて、霊告符合の気配の時運を直視して皇帝年代記に後堀河天皇紀を書き継いでいる。^[14] 摂関家の九条家興隆を道理として史論を展開させており、そのため、もう一つの摂政関白に就ける摂関家の近衛家について、別帖の後鳥羽天皇の条で、

近衛殿攝籙モトノゴトシト被_レ仰ニケリ。一定平氏ニグシテ落ベキ人ノトマリタレバニヤ。又イカナルヤウカアリケン。サレド近衛殿ハカヤウノ事申サタスベキ人ニモアラズ。スコシモヲボツカナキ事ハ右大臣二問ツ、コソヲハシケレバ、タゞ名バカリノ事ニテ、(中略) 大方攝籙臣ハジマリテ後コレコレ程ニ不中用ナル器量ノ人ハイマダナシ。カクテコノ世ハウセヌル也。

(卷五——二五六〜五七ページ)

とあつて、平家一門が都落ちをしていく寿永二年(一一八三)七月二十五日の当時、廟堂で九条兼実に向かひて政治上のことを尋ねなければ執政の「臣」として役目を果しえない近衛基通の不器量を詰っている。施線は、平家衰亡の事態と先の見通しが無い時局と近衛家が執政の「臣」に就いている廟堂との両面から、憤慨に堪えないとの

思いで慈円は叙述している。近衛基通が「臣」に就いているので、右文の施線に摘記しているように「コノ世ハウセ」てしまうのだとの批難の言辞は、付録の前半の文章である「史」の論で、善政を敷いていた執政の「臣」在任中の三十九歳の若さで九条良経は頓死したことを取り上げて、

タバシバシコノ院ノ後京極殿良経ヲ攝籙ニナサレタリシコソ、コハメデタキ事カナトミエシホドニ、ユメノヤウニテ頓死サラレニキ。近衛殿ト云父子ノ、家ニハムマレテ、職ニハ居ナガラ、ツヤクトカイハライテ、
 (中略) イマダウセズシナデヲハスルニテ、ヒシト世ハ王臣ノ道ハウセハテヌルニテ侍ヨト、サハクトミユル也。
 (巻七——三三五〜三六ページ)

施線で九条家に対照させながら、波線は天福元年(一二三三)五月十九日に七十四歳で基通、その子家実は仁治三年(一二四二)十二月二十七日に六十四歳で没するわけだが、史論を展開させている当時の承久年間(一二一九〜二二)は生存していた。二重施線で現今の廟堂に居座っている近衛基通・家実父子をもとに、君臣の道は破綻してしまっていると慈円は熾烈に糾弾している。それが前掲した別帖の「カクテコノ世ハウセヌル也」であった。「世ノ人迷惑云々」の「云々」との言辞には、承久の乱後の混乱している世の混乱で戸惑っている人のことを下敷きにしてはいようが、『愚管抄』の本質からは廟堂で跳梁している執政の「臣」である近衛家実の所業を世人が厭わしく思っているとの意味を込めた判断される。それが本章の最初に掲出した「世ノ人迷惑云々」と慈円が摘記した理由であつて、『新古今集』の歌人慈円の修辞「見立て」や掛詞等が介在していると推定したい。万感こもこもの思いを託している。

『愚管抄』 皇帝年代記の後堀河天皇紀に二重施線を付したように後鳥羽院ら流刑の事象をめぐって「但ウルハシキヤウニハナクテ令ニ首途ニ給云々。」との文に籠る慈円の真意を探ってみよう。

『愚管抄』別帖の同時代史を終結して跋文に及ばせる直前で後鳥羽院に「不力思ギノ君ノ御運、御案ノメデタサト、心アル人ハコレヲノミメデタクゾ思ヒヒタリケル。」(巻六——三七ページ)として同じ視座であった。ちなみに十三世紀中頃から以後の成立の『平治物語』にも「……「いかなる宿縁にてか、二代の君をば守護

し奉るらん」と心ある人は申けり。」(上・三条殿へ発向事)と描かれて、「ものの道理をわきまえているほどの人は噂しあった。」(小学館・目下力訳・「この種の語りは、『日本書紀』以来『愚管抄』にもみられる。」(弥井書店・山下宏明の頭注)があり、『勝事記』を介して『愚管抄』と『平家物語』初期生成をみていくうえで参考になるであろう。『愚管抄』の本質からは後鳥羽院への「負」の視座はない。そのことは皇帝年代記の当該の施線・二重施線は靈告符合への思いを抱きながら書き継いだからであって、後鳥羽院の「御運」すなわち運命と「御案」すなわち政治的配慮を別帖では讃えているためである。¹⁵⁾

『愚管抄』皇帝年代記の「世ノ人迷惑云々」には、末代の道理として仲恭天皇が即位し、九条道家が執政の「臣」に就いたが、道理がくずれて現今では執政の「臣」には近衛家実が就いている。前掲した『愚管抄』の「不中用ナル器量ノ人ハイマダナシ。カクテコノ世ハウセヌル也。」・「家ニハムマレテ、職ニハ居ナガラ、ツヤ／＼トカイハライテ、(中略)イマダウセズシナデヲハスルニテ、ヒシト世ノ王臣ノ道ハウセハテヌル」の道理史観が通底している。当該の「ウルハシキ…」の一節は付録に「諫言」・「人材論」を書き継いだときの率直な筆致ではない。靈告信仰が回復したときの慈円の思いが籠る。それは、次のような理由からである。皇帝年代記の後堀河天皇紀の後鳥羽院らの配流を二重施線で「但ウルハシキ…」の末尾に「云々」の言辞が添えられている。この「ウルハシキ…」を、配流は流刑であって、罪人を遠く離れた土地に追放する刑罰である。「愁い」か「憂い」の意味を籠めて「ウレハシキ…」とでも摘記した方が実情からは適切のように思われるかもしれない。にもかかわらず、漢文訓読体の仏などへの端麗・華麗な美しさ、和文脈でのきちんと整っている、礼儀正しいという意味を濃く保っている形容詞の「ウルハシキ」を用いた。¹⁶⁾そこには、承久の乱勃発にともなう仲恭天皇が退位、九条道家も摂政を辞任したので、詞を重層させる歌人の慈円は貞応二年(二二三)に四天王寺聖霊院の絵堂の再建を行い、新たな聖徳太子の靈威を祈請した。翌三年正月には太子から「重祚・上皇帰洛・摂政之還補・將軍之成人」(『聖徳太子願文』)の靈告がくだって、別帖を叙述していた筆致に立ち戻って、『愚管抄』皇帝年代記に堀河天皇紀を書き継いでいくなかで後鳥羽等の配流を摘記したからであった。¹⁷⁾

○

★『愚管抄』では承久の乱にともなつて後鳥羽院らの配流には「十三日御下向云々。但ウルハシキヤウニハナクテ令_レ首途_二給云々。」とあつて、「ウルハシキ」の形容詞を用いて簡略であつたのに対して、『勝事記』の佐渡廃帝の条では、

同十三日に隠岐国へうつしたてまつるに、ものゝふ御こしに立そひて先途をすゝめもうせり。かたぶく月のをしかるべき御名残なれば、さいぎりて見たてまつりし人々、朝恩にほこりしも朝恩にもれしも、涙をおとさずと云事なし。消ゆくもみゆきのふりにし

あとをたづねれば、鳥羽より西はさだまれる式にて、ものゝふのありきをまなび給しぞかし。

(八八〇九ページ)

と詳細に描かれている。『愚管抄』の二重施線「令_二首途_一給」は簡略すぎるが、『勝事記』の二重施線から「定まつた方式で武士の行為を模倣して出立された」と理解されてくるのは確かであろう。『愚管抄』を敷衍したような文章になっている。その一方、『勝事記』の「序」に認めているように「安元の比より貞応の今にいたるまでの事は、夢うつゝとおもひわかぬほどながら、見もし聞もせしこと」を、承久の乱後の余燼がくすぶる治世のもとで起筆し、「六十年より……兆民かうぶらむ事をねがふばかり也。」と史論を括った。『愚管抄』皇帝年代記に後堀河天皇紀を書き継いだのは靈告信仰の回復後であつた。貞応二・三年の当時、慈円は靈告への懷疑をいだいた。その当時の成立である『勝事記』は、乱を引き起こした後鳥羽院の指弾で貫ぬかれていた。これが『愚管抄』との相違点なのである。

○

『愚管抄』のモチーフは靈告である。それに則つて後堀河天皇紀に後鳥羽等の配流に際して「ウルハシキ」との形容詞を記す。甥の九条良経そして慈円自身も後鳥羽院が情熱を傾けた『新古今集』寄人であるので、歌論の『後鳥羽院御口伝』に「うるはしくたけある姿あり(中略)今初心の人ために初心者のために略して」・「うるはしくして、(中略)うるはしくやさしき様」等と頻出し、しかも同歌論では式子内親王と良経につづけ、慈円を、

……古水大僧正、これら殊勝なり。(中略)大僧正は、おほやう西行がふりなり、すぐれたる哥、いづれの上手にもおとらず、……

讃えている。建暦二年(一二二二)頃より承久元年(一二二九)以前の院の歌論であるとの説に従えば、院の文言を追体験して「愚痴無智ノ人」に道理を説く史論に転用したことにもなるであろう。他方、『新古今集』切り継ぎ

にも熱意を傾けていった後鳥羽院への追懷の心情が、『愚管抄』に後堀河天皇紀を書き継いでいる際に慈円の場合に湧出した。そこに『勝事記』との決定的な相違が介在する。『愚管抄』にある「ウルハシキ」は「よく整って調和ある美しさ」を意味しているとすれば、院は慈円を「うるはしき歌人」とみていたことにもなるう。「世ノ人迷惑云々」の直後が「七月八日於『鳥羽殿』御出家、十三日御下向云々。」であった。この一文に直結させているのが「十三日御下向云々。但ウルハシキヤウ二ハナクテ令『首途』給云々。」なのであるから、時間の推移を追って事態を列挙している。三つの文の間には、歌人として評価してくれていた後鳥羽院への追慕の情が籠もっている。歌の修辞の「見立て」が無意識にはたらいで、皇帝年代記の後堀河天皇紀にある院の流刑に「ウルハシキ」の形容詞を配した。後堀河天皇紀を布置したのは、靈告符合への思いが歌人の慈円に甦ったからに他ならない。

(四) 構成と方法

小著ですでに次のようなことを論じた。『聖徳太子伝暦』を熟読していた慈円は、聖徳太子自身が編纂した『天皇記』は蘇我入鹿誅殺のときに烏有に帰してしまっている。そこで、蘇我馬子と物部守屋との争いの際に、戦勝祈願によって創立された由來がある四天王寺への信仰を深めて、承元元年（二二〇七）十一月三十日に当寺の別当に就く。建永元年（二二〇六）三月七日に甥である九条良経が執政の「臣」在任中に頓死、翌年の承元元年四月五日には兄の兼実も逝去した七ヶ月後であった。信仰するのは「荒陵寺御手印縁起」（四天王寺縁起）には太子の教えを遵守していくならば子孫の繁栄がもたらすと説かれているからであった。承元三年三月二十三日に良経の女の立子が入内した三ヶ月後に『慈鎮和尚夢想記』を西山で起草した。これは『愚管抄』別帖・付録「史」の論の雛形になるものであった。承元四年頃には慈円圈を組織して、『頼朝の物語』を内実とする原『平家物語』である『治承物語』を企画し、有縁の人材を呼集して創出させていく。建暦二年（二二二二）正月十六日に天台座主に還補されて、『荒陵寺御手印縁起』の教えをもとに太子の編纂した『天皇記』を現今に復活させる。これが『愚管抄』

の皇帝年代記を編纂した宮為なのであった、と。¹⁸⁾他方、『明月記』承元元年二月二十六日条に「壇所に於て大僧正御房に見参す。」、承元二年七月十八日にも「僧正御房御戒の後」とみえており、承元元年頃から九条家の後退をはかんだ慈円が西山隠棲ををはじめめる心情を定家は弁えている。そのことを付言しておこう。

太子讃仰が功を奏して、建保六年（一二二八）正月十六日に八十四代順徳天皇と立子とのあいだに懐成親王が誕生した。そして同親王は既述したように八十五代仲恭天皇として即位する経緯を慈円は叙述していく。同年十一月二十六日、右大臣九条道家が皇太子傳に就くのが立子の弟の九条道家。翌年の承久元年（一二二九）六月二十五日九条道家の子の頼経（三寅）が四代鎌倉將軍繼嗣となった。この二つの事象を末代の道理として『愚管抄』別帖で総括する。四代鎌倉將軍繼嗣の事象を、

二歳ナル若公、祖父公経ノ大納言ガモトニヤシナヒケルハ、正月寅月ノ寅ノ歳寅時ムマレテ、誠ニモツネノヲサナキ人ニモ似ヌ子ノ、占ニモ宿曜ニモメダク叶ヒタリトテ、ソレヲ、終ニ六月廿五日ニ、武士ドモムカヘニノボリテ、クダシツカハサレニケリ。京ヲ出ル時ヨリクダリツクマデ、イササカモクナクコエナクテヤマレニケリトテ、不可思議ノコトカナト云ケリ。

（巻五——三二五—一六ページ）

施線のような寸言を慈円は添えた。「冥顕二法」の「冥」すなわち聖徳太子の計らであるとの思いが行間に介在している。別帖に続いて付録を慈円は書き継ぐ。將軍繼嗣の事象を批評するのが「史」の論の主旨である。ここでは、あらためて別帖の全容を俯瞰しながら、永承七年（一一〇五）には仏法が廢れる時代すなわち末法の世へ突入したとして、その一世紀後の同時代「武者ノ世」へ及ばせて、

末代悪世、武士ガ世ニナリハテ、末法ニモイリニタレバ、タバチエウバカリコノ道理ドモヲ君モヲボシイデ、コハイカニトヲドロキサメサセ給テ、サノミハイカニコノ邪魔悪靈ノ手ニイルベキトヲボシメシ、近臣ノ男女モイサ、カヲドロケカシトノミコソ念願サラレ侍レ。

（巻七——三四〇ページ）

戦乱や貪欲や嫉妬さらには怨霊がとりつくので、治世を領導する廟堂にいる人々をはじめ院の近臣等と呼びかけ、

神武ヨリケフマデノ事ガラヲミクダシテ思ヒツバクルニ、コノ道理ハアササガニノコリテ侍ル物ヲトサトラレ侍レ。(中略) 最眞實ノ眞實ノ世ノナリユクサマ、カキツケタル人モヨモ侍ラジトテ、タバ一スチノ道理ト云コトノ侍ヲカキ侍リヌル也。

(巻七——三四三ページ)

として、順徳天皇の在位する治世で顕現した四代鎌倉將軍繼嗣を道理と揚言したのであった。これが「史」の論すなわち『愚管抄』付録の前半の趣旨なのである。他方、別帖の承久元年(二二九)六月二十五日に九条良経の女の立子から生誕した懷成親王の立坊をめぐっては、

十月十日寅ノ時ニ御産平安、皇子誕生思ノゴトクノ事出キニケリ。上皇コトニ侍ヨロコバセ給テ、十一月廿六日ニヤガテ立坊有ケリ。清和ノ御時ヨリ一歳ノ立坊サダメレル事也。カ、ルメデタキ事世ノ末ニ有ガタキ事カナ、猶世ハシバシアランズルニヤナド、上中下ノ人々思タリケリ。

(巻六——三〇六ページ)

後鳥羽院が喜悅したと象り、末代の現今はなお維持される時運の到来であると批評した。この論調は付録の前半の「史」の論までの文章では踏襲されていた。ところが、この「史」の論に続く付録の中間部の文章に及ぶと、「カネテヨリ心得フセテ」(巻七——三四六ページ)いた院の討幕計画そのものを見据えて率直な慈円の思念が充溢しはじめる。当該の文章の趣旨は院への「諫言」なのである。付録の後半の文章は、激昂した心情が鎮静したあと、悲哀の感情が浮き出させて「トカクヨキ人トモ、ワロキ人トモ云ニタラヌ事ニテ侍也。」(巻七——三五二ページ)とか、「大方心アル人ノナサコソ申テモく、カナシケレ。」(巻七——三五五ページ)と悲憤慷慨して、「言語シスデニ道断侍リヌルニナム。シ、モテマカリテハ、物ノハテニハ問答シタルガ心ハナダサムナリ。」(巻七——三五六ページ)として付録全体が閉じられた。付録の後半の内容は「人材論」となっており、「諫言」と同質の論調である。¹⁹⁾末代の道理からは、「諫言」・「人材論」そのものはまさしく付録であった。

次に、『愚管抄』と『勝事記』とを対比してみよう。

『勝事記』の構成は、

一、序文付皇代目録(序論)

二、歴史叙述部（本論）

三、歴史評論部（結論）

であるので、序論の「序文付皇代目録」は『愚管抄』に皇帝年代記、本論の「歴史叙述部」は神武天皇より順徳天皇の在位する治世を叙述した別帖、結論は付録の「史」の論にそれぞれ重なっている。

承久元年（一二一九）六月二十五日道家の三男の頼経（三寅）が將軍繼嗣として下向したことを批評するために付録の「史」の論を書き継いで、「今ハ正道ヲ存ベキ世ニナリタル也。」との言辞に直結させて、

コノ東宮、コノ將軍ト云ハワツカニ二歳ノ少人ナリ。コレヲツクリイデ給フ事ハヒトヘニ宗廟ノ神ノ御サタアラハナル。

（巻七——三四二ページ）

とした。施線で懷成親王の立坊と道家の子である藤原頼経の將軍繼嗣を二重施線にあるように「冥顯二法」の道理に則って、批評したのであった。將軍繼嗣の事象も『勝事記』の佐渡廢帝（順徳天皇）の条に、

右府の母室二品禪尼、將軍を申に、三代の余流むなしからず、後京極の孫右大臣家の末子をくだしつかはさねぬ。

（八一ページ）

とやはりある。

『勝事記』の文章には、「冥顯の擁護」（七一ページ）・「仏法をおこし、王法をつぎ」（七三ページ）等との言辞がある。「冥顯二法」の道理・仏法王法相依の道理を説諭する慈円の史論からの影響は明白であろう。

（五）『勝事記』作者と縁戚と法脈

『勝事記』の阿波院天皇（土御門天皇）の条に、次のような場面が描かれている。すなわち、

建久元年丙寅三月七日、摂政太政大臣良経頓死。後京極殿と申にや。文操人にすぎ、理政民をなせ、諸道に浅深をさぐりて浮沈をはかり、万機に補佐して親疎なかりき。

花尚昔花留⁽¹⁶⁾有露 宅斯旧宅廢無人

金谷のはなのほひ、南樓の月のかげ、袖をかはしてみしとをこひ、ゆかをひとつにしてながめし人を忍ぶるに、春ゆき秋きたれ共、むなしく年を記して、いたづらにおもひをいたましむるにや。前大僧正慈円、つひに行べき道なれど、一日も二日もうちなやみて、おもふ事をもいひつゝ、かゝるべし共かねておもはなくは、よのつねなれば、なぐさむかたもありぬべし。

(七六―七ページ)

九条良経の漢詩をもとに、施線では『本朝文粹』(巻一四・「為謙徳公修報恩修善願文」)を踏まえて良経を追悼している⁽²¹⁾。さらに良経の叔父の慈円が「死は世の常ではあるにしても、このような異常な死に方に何とも慰められようもない」と追慕の情を横溢させた。九条家への親愛の情を行間にたたえつつ、抒情性や哀傷性のともなった精彩な形象でくまどつた。

『勝事記』作者の候補としては、今のところ信濃前司行長・葉室定経・藤原長兼・源光行・藤原隆忠があがっている。このうち(一)の章で既述したように高橋説の藤原長兼を擬したのに左袒したい。それは伊藤説も、『勝事記』の序文の「貞応の今にいたるまで」と阿波院天皇(土御門天皇)の条で、執政の「臣」として活躍していた良経の頓死につづけて、前掲したように形象されていることに着眼して、

六代勝事記の成立が序に言うように貞応の今とすると、まだ慈円の没年前である。(中略)当代一流の文人政治家良経に仕えた作者が、主人の死をとくに哀悼してわざと書き入れたのである(中略、私案では、長兼の可能性がより大のように思う……)

と論じている⁽²²⁾。さらに刮目しなければならないのは、久保田説も前掲したように「それは長兼によって書かれても、また他ならぬ定家によって書かれても当然であったと考える。」として、長兼と併せて定家の名をも記した⁽²³⁾ことである。『勝事記』作者は長兼と定家のいずれかであろうとの含みのある筆致でもあろうが、兩人列挙の久保田の言説そのものに感興を誘われてならない。理由は、長兼の父の長方は定家の従兄であった(西山の慈円圖の人は後述、相関図は後掲する。)ので、「長兼と定家とが歩調をあわせて『勝事記』を成立させた」との思いが筆者尾崎

には湧出する。それは『愚管抄』の現形態になるまでには——、皇帝年代記に緻密に事象を時系列に刻み入れ、別帖・付録の日本全域の多様な事象を仮名で逐次書き継いでいく——。多岐をきわめている。後鳥羽院へ進講した学匠にして九条良輔の師であり、慈円とも交わっている菅原為長の協力を道理を構築するために推定したからであった。²⁵⁾

定家は西山の慈円圈に参画して行長や宇都宮入道蓮生（定家の嫡子の為家の妻に蓮生の女を迎えた。）とすでに『治承物語』創出していることに配意したならば、最初の史論『愚管抄』の成立から二年後に成立させていった第二番目の史論『勝事記』も二人三脚であったのではあるまいか。六十余歳の老境に入つた藤原長兼であつたことを顧慮したとき、本章の冒頭に掲出した阿波院天皇（土御門天皇）の条もそうであつたが、安徳天皇の条に描かれている平家一門の西海漂泊をめぐる一節が、

保元の春の花、寿永の秋の葉とおちはて、八条の蓬壺、六原の蓮府、暴風ちりあげ、煙雲ほのほをはけり、龍頭鵠首を海中にうかべて、波上に行宮しづかなる事なし。いそべのつゝじの紅は、そでの露よりさくかうたがひ、さ月のとまのしづくは、ふるさとをのきのしのぶにあやまる。月をひたすうしほの、ふかきうれへにしづみ、しもをおほへるあしのはの、もろき命をあやぶみ、洲崎にさわぐ千鳥の声は、あか月のうらみをそへ、そばにかゝるかぢの音は、夜半に心をくだき、白鷺の遠松にむれるるを見ても、えびすはたをなびかすかとあやしみ、夜雁の遼海になくを聞ても、つはもの舟をこぐかとおどろく。青嵐膚をやぶりて、翠黛紅顔の粧やうやくおとろへ、蒼波眼うけて、懷古望郷の涙おさへがたし。

住なれし都のかたはよそながら袖になみこす磯の松風

（六九七〇ページ）

きわめて絢爛な格調の高い彫琢がなされており、しかも躍動する抒情性にあふれた清新さがみなぎつた文章になっている。『明月記』建暦二年（一二二二）一月二十一日条に、

廿一日。辰の時に雨降る。終日濛々たり。天明に華洛を出で、孤舟を棹す。雨脚滂沱たり。漸く黄昏に及びて、神崎の小屋に着く（静快律師、同じく此所に宿す）。

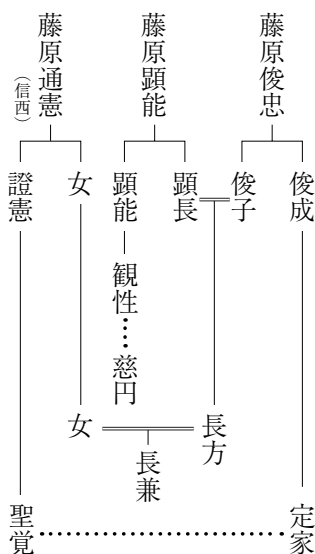
沙堤雨の裏行人少なし。纔に漁舟を伴ひて宿を問ひて来たる 月黒く雲陰りて徐ろに 夜ならんと欲す
猶江水を望みて独り徘徊す

はるさめのあすさへふらばいかがせんそでほしわぶるけふのふな人

と定家は記していた。同日の条は、平家一門の西海漂泊を描いた『勝事記』の文章とほぼ呼応するであろう。それにひきかえ長兼が作者とみなせる可能性があるにしても、平家一門の西海漂泊のような場面を描くことを証拠立てる長兼の文才そのものが具体的に管見には入ってこない。『勝事記』の成立に定家が協力していたと憶断されてくる。そこで定家と長兼との縁戚関係と法脈との相関図を掲出してみよう。すなわち、

〔相関図〕

(実線は血縁関係、点線は法脈)



である。

この相関図から知られることは、長兼の父の長方は定家の従兄であるわけだが、長方の従兄弟には慈円の師であった第二代の西山の往生院院主が観性であることに注目せねばならない。観性の弟子が慈円であり、西山に慈

円圈を組織したとき慈円自身は第三代往生院院主になっている。法脈からつながる。

さらに相関図から判然とすることは長兼と聖覚とはおたがいに従兄弟同士であった。慈円圏で創出した原『平家物語』『治承物語』を遺存している屋代本に、

祇園別当澄憲法印、其比未権大僧都ニテ御坐シケル力、名残テ奉_レ惜、泣々梁津マテ送奉_レラル。自_レ其澄憲暇申テ被_レ返ケルニ、明雲僧正年来己_レ心中ニ残サレタリケル天台円宗秘法、一心三卷ノ法門并ニ血脈相承ノ譜ヲ授_レラル。此法ハ釈尊ノ付属ヲ、波羅奈国ノ馬鳴比丘、南天竺ノ竜樹菩薩ヨリ次第第二相伝シ来_レルヲ、今日ノ情ニ澄憲ニ是ヲ受_レラル。我国ハ粟散辺地境、濁世末代トハ云ナカラ、澄憲ヲ付属シテ、法衣ノ袂ヲ押ヘツ、被_レ返ケルコソ哀ナレ。

(巻二「先座主明雲罪科儀定 同配流事」)

と描かれている。施線にある「一心三卷ノ法門并ニ血脈相承ノ譜」を授けたとなっている。他の語り本系では「一心三卷の血脈相承を授けらる。」(覚一本)等とか「一心三卷ノ相承血脈ヲ授_レラル。」(盛衰記)と仏事善行をしたと不自然な場面構成になってしまっている。屋代本の施線のように「譜」すなわち文書だけを手渡したと描く方が悲境に立つ慌ただしい流罪に際しては実情になつてゐる。⁽²⁶⁾二重施線の「澄憲」は安居院流の祖、しかも子が聖覚であった。『明月記』建久三年(一二九二)三月十六日の条より嘉禎元年(一二三五)四月二十二日の条までには、「聖覚」の名が八十例ほど頻出してゐる。定家が三十一歳から寂する八十歳の六年前にあたつており、終生、「聖覚」とは親密な交わりをしていた。⁽²⁷⁾屋代本は、西山の慈円圏で創出した『治承物語』を遺存させていることに照らして、聖覚との法脈から『勝事記』成立に關与する定家が推定されよう。

相関図をもとにしたとき、西山の第三代往生院院主である慈円が慈円圏を組織して原『平家物語』の『治承物語』創出に定家が参画していたことを顧慮したならば、その慈円圏での本物語創出があつた建保末年より五年後の貞応二・三年の文事である『勝事記』成立に長兼と定家とが歩調をあわせても不自然ではないのではあるまいか。

(六) 平重盛の形象をめくって

慈円圏で創出した原『平家物語』である『治承物語』を遺存している屋代本では、平重盛の死に際して、

此大臣ハ、文章端ワレハシクシテ忠二思ヲ存シ、才芸正クシテ詞二徳ヲ兼タリ。サレハ世二ハ良臣ヲ失エル事ヲ歎キ、家二ハ武略ノスタレン事ヲ悲ム。

(巻三「同内府病事同死去事」)

重盛の器量を讃えながら、平家一門の「武略」が廃れてしまうことを世人が悲嘆したと描き、『愚管抄』・『勝事記』をも取用して慈円周辺圏で再編された六巻本『治承物語』の延長線上にある延慶本では、

凡ソ此大臣文章ウルハシクテ、心二忠ヲ存ジ、才芸正クシテ、詞二徳ヲ兼タリ。サレバ世二ハ良臣失ヌル事ヲ愁へ、家二ハ武略ノスタレヌル事ヲ歎ク。心アラム人、誰力嗟歎セザラム。

(二本・二三「小松殿大國ニテ善ヲ修シ給事」)

潤色が濃厚になっており、増補されたのは確かである。圏点からも『愚管抄』と『治承物語』の影響があろう。一方、『勝事記』の安徳天皇の条には、

入道大相国薨ぬ。其家嫡小松内府のさいぎりて薨ヌせし、世には賢相の名誉ををしみ、家には武將の兵略をうしなへり。

(六八ページ)

とあって、平清盛の死に直結させて、二重施線で平家一門の嫡男である重盛は「先だつて」死去したと描いている。屋代本・延慶本そして『勝事記』とを比較した富倉徳次郎は、

「屋代本」の詞章が「六代勝事記」の詞章の影響を受けて成ったものであることを認めなくてはならない。

との見方をした。⁽²⁸⁾この言説に留意して、定家が参画した慈円圏で創出した『治承物語』を遺存させている屋代本の重盛像の特質を探っていこう。

『百鍊抄』治承三年(一一七九)八月一日の条にも、『勝事記』と同じように、

入道内大臣重盛公薨。入道前太政大臣嫡子。武勇雖軼レ軼二時輩一。心操甚穩也。去比参二熊野一有二祈請一。

施線で重盛は武勇について他の連中よりは突出しているとし、二重施線には心性はたいへん穏やかで熊野参詣をするほどであったと記載している。殊に留意したいのは、施線にあるように「武」の側面が添えられていることである。『愚管抄』別帖の二条天皇の条にも、

平氏ガ方ニハ左衛門佐重盛清盛嫡男・三河守頼盛清盛舎弟、コノ二人コソ大將軍ノ誠ニタ、カイハシタリケルハアリケレ。重盛ガ馬ヲイサセテ、堀河ノ材木ノ上ニ弓杖ツキテ立テ、ノリカエニノリケル、ユ、シク見ヘケリ。鎧ノ上ノ矢ドモオリカケテ各六波羅ニ参レリケル。

(巻五——三三五ページ)

平治の乱で奮闘している重盛がひとときわ精彩を放つて象られている。「武」の側面がきわめて具体的叙述されており、さらに別帖の高倉天皇の条では、

小松内府重盛治承三年八月朔日ウセニケリ。コノ小松内府ハイミジク心ウルハシクテ、父入道ガ謀叛心アルトミテ、「トク死ナバヤ」ナド云ト聞ヘシニ、イカニシタリケルニカ、父入道ガ教ニハアラデ、不可思議ノ事ヲ一ツシタリシナリ。子ニテ資盛トテアリシヲバ、基家中納言婿ニシテアリシ。サテ持明院ノ三位中将トゾ申シ。ソレガムゲニ若カリシ時、松殿ノ攝籙臣ニテ御出アリケルニ、忍ビタルアリキヲシテアシクイキアヒテ、ウタレテ車ノ簾キラレナドシタル事ノアリシヲ、フカクネタク思テ、関白嘉応二年十月廿一日高倉院御元服ノ定ニ参内スル道ニテ、武士等ヲマウケテ前駟ノ髻ヲ切テシナリ。コレニヨリテ御元服定ノビニキ。サル不思議アリシカド世ニ沙汰モナシ。次ノ日ヨリ又松殿モ出仕ウチシテアラレケリ。コノフシギコノ後ノチノ事ドモノ始ニテアリケルニコソ。

(巻五——二四六、四七ページ)

二重施線で重盛の心性を讃美し、施線では「不可思議」なこととして重盛による執政の「臣」藤原基房への暴挙の顛末、「武」そのものを具体的に押し出して、ふたたび「不思議」と批評しながら波線の言辞のなかで「コノフシギ」との寸言を添えている。同意語を三回も繰り返した。『百鍊抄』に「武勇雖軼一時輩」記載されているので、重盛の強烈な「武」が当該の文章では顕著である。それは、既存の「世継物語」の『今鏡』が語り終えた嘉応二年を引き継いで慈円園で創出した新奇な「世継物語」である「いくさ物語」すなわち『治承物語』をは

じめて叙述する慈円の思念が『愚管抄』の当該の文章には充溢したと判断される。換言すれば、『治承物語』の発端を取り込んで、以下では頼朝の旗揚げへ及ばせ、壇ノ浦に海戦を経て、王法と仏法とが安寧になつていく治世の推移を、『治承物語』の内実である「頼朝の物語」に依拠しながら叙述していくからであつた。^[20]

『山槐記』 治承三年（一七九）五月二十五日条に、

前内大臣正二位平重盛年四十二、依病出家、千時嚴親入道太政大臣見存、日来不食云々、去二月東宮御百日出仕、

其後籠居、三月被參熊野□申後世事云々

病により出家したとある。その二ヶ月前、施線部の熊野参詣をめぐる事象については屋代本に、

其比、熊野参詣ノ事有。本宮証誠殿ノ御前ニ參給テ、大臣終夜祈請申サレケルハ、「父入道相国ノ体ヲ見候

ニ、一期ノ榮花猶アヤウシ。無道ニシテ動レハ君ヲ奉レ惱。（中略）重盛力運命ヲツ、メテ来世ノ苦輪ヲ助給ヘ。

両ケ愚願、偏ニ仰ニ冥助ニト、摧ニ肝胆ニテ祈念セラレケレトモ、人是ヲ不レ知。灯炉如ナクル物ノ、大臣

ノ御身ヨリ出テ、バト消ル様ニシテ、失ニケル。（中略）然ニ此君達、無レ程実ノ墨染ノ色ニナラレケルコソ

哀ナレ。

（巻三「小松内府熊野参詣事」）

平家一門の衰亡から重盛の死去を先取っている。頼朝勢の攻撃によつて、重盛の孫である六代も二十六歳で処刑されたことへと展開させ、

遂ニ被レ切ケリ。十二ヨリシテ廿六マテ持ケルハ、長谷観音ノ御利生トソ聞ヘケル。其ヨリシテ平家ノ子孫

ハ絶終ケリ。

（巻一二「六代御前千時三位御前被誅之後平家一門跡絶事」）

六代が延命ができたのは観音菩薩の利生であつたとの一文を添えたのは『愚管抄』にある「コノフシギ」と類同する。「冥顯二法」の道理から本章段は括られたのであつた。この文の直後には、

平家物語第十二之終

と記され、物語はすべて終わった。屋代本と慈円の史論とは軌を一にしている。

西山の慈円圈で創出した『治承物語』に形象化された重盛は、『勝事記』に描かれていった。慈円圈に参画し

ていた定家が、『勝事記』にも筆を入れたからであろう。

定家の歌と『勝事記』——結びにかえて——

定家の歌に着目し、第二番目の史論である『勝事記』成立へ関与する定家を、最初の史論『愚管抄』と慈円園から慈円周辺園での文事をあらためて俯瞰して、たどりなおして結ぶことにしよう。

定家は、

いはへどもわがため露ぞこぼれそふ藤のさかりを松はふりつゝ

(二六七三)

「松」に自己を掛けながら「藤のさかり」には藤原摂関家の正嫡である九条良経の頓死にともなつて遺児となつた嫡子の道家ら九条家一族がともどもに「さかり」がもたらされることを願つた歌である。『勝事記』の隠岐院天皇（後鳥羽天皇）の条には、建久三年（一二九三）三月十三日の後白河院の崩御に關連して、

大宮人は、さくら色に染したものと、おしなべて卯月をまつにさきかゝる藤の衣にたちかへき。慈悲の恵、
一天の下をはぐくみ、平等の仁、四海の外ながれき。

風ふかぬ御世にも猶ぞおもひ出る入にし月の春の面影

(七四ページ)

廟堂の人々は桜色に染め抜いた衣の袖に三月の翌月の卯月に「待つ」をかけ、「まつ」すなわち松に咲きかかる藤の衣すなわち「喪服」に着替えたとし、後白河院の慈悲の恵みは、世の人々をはぐくみ、平等の仁慈は世の中の外まで流れでましたと追懐する一節と定家の二六七三番歌とは類同していよう。『勝事記』の歌では、上の句では当院によつて治世が安穩であつたことを思うと明言して、極楽に往生された当院の面影が偲ばれると詠じた。『源氏物語』の「藤裏葉」巻で、内大臣が光源氏の子の夕霧を自邸に招いて、我が娘の雲居の雁を夕霧に妻としてすすめる場面^で、

御時よくさうどきて、「藤の裏葉の」とうち誦じたまへる、御けしきを賜はりて、頭の中將、花の色濃く、

ことに房長きを折りて、客人の御盃に加ふ。取りてもてなやむに、大臣、

紫にかことはかけむ藤の花まつより過ぎてうれたけれども

宰相、盃を持ちながら、けしきばかり拝したてまつりたまへるさま、いとよしあり。

いくかえり露けき春を過ぐし来て花のひもとくをりにあらなむ

頭柏木の中將に賜へば、

たをやめの袖にまがへる藤の花見る人からや色もまさらん

次々順流るめれど、酔ひのまぎれにはかばかしからで、これよりまさらず。

内大臣が、わが家の藤の花のひとしお色深い夕暮に、いく春のなごりを求めておいでになりませんかと詠じると、夕霧は謝意を籠めて、拝舞は優雅でしたと和し、夕霧から柏木へ盃をさしだした。柏木も、藤の花に雲居の雁をかけて美女の袖の色にも似た藤の花は、賞美する人によつて一層美しさをますことでしょうと和したとあった。この「藤裏葉」巻の物語を本説として、定家の二六七三番歌そして『勝事記』の後白河院崩御を回顧し、施線部のように描かれている。要するに、ともに本説取りの修辭がこらされた。後鳥羽院の条を描いた『勝事記』の歌には慨世憂国の怒りも重層する。

定家が六十二歳から六十三歳にかけて『勝事記』が成立、七十六歳から七十九歳頃にかけて六卷本『治承物語』の再編がなされる。その時期は、後鳥羽院の隠岐配流から崩御の前年にあたる。『明月記』寛喜元年（一二二九）十二月二十八日の条では、

又云ふ、故中納言長兼卿三男（前八省輔、名忘る）去る比、謀書の聞え有り（謀りて国司に任じ任ずる料錢を取る）。

と記載されていた。嘉禎三年（一二三三）頃から仁治元年（一二四〇）頃より十年前、定家六十八歳の時に圈点にあるように故人長兼としていたので、長兼と親交があった証憑の一つになるはずである。

『治承物語』を『愚管抄』に取り込み、すでに慈円圈にいた宇都宮入道蓮生は慈円周辺圈にも参画する。蓮生は『平家物語』初期生成に深く関与した人材であった。³⁰⁾ 蓮生の女を嫡男為家の正妻にした定家は、蓮生と同じよ

うに『治承物語』そして六卷本再編にも参画していく。³¹⁾ 六卷本を祖本する延慶本に、明恵の夢に現れた文学(文覚)は承久の乱を予告して消えるが、後鳥羽院の謀叛は文学の霊であると描いた部分に、

此皇、芸能ニヨ並ルニ、文章ニ疎ニシテ弓馬ニ長ジ給ヘリ。 (六末・三六「文学被流罪事 付文学死去事 隠岐院事」)

との一文が載っている。これは、他の『平家物語』諸本には見られない独自異文なのである。『勝事記』の佐渡廢帝(順徳天皇)の条に、

ちか比西面とてえらびおかれたる、いつわりて弓馬の芸と称するたぐひの、貫録みにあまり、宴飲心をまどはして、朝にうたひ夕に舞、たちのあらましには、あはれいくさをしてさきをかけばやとのみねがひて、

(八一ページ)

後鳥羽院が組織した「西面」という在京の弱少の武士が身分不相応に勲功を欲しがっている有様を指弾しながら描いている。³²⁾ 批判の視点からではないが、『愚管抄』にも源頼政の孫が四代鎌倉將軍に就こうとの思いを抱いたので、院は「在京ノ武士ドモ申テ、……」(巻六・三三七ページ)討たせたと「西面」の実態を叙述していた。方法では呼応しているよう。しかも延慶本には、

「去夜ノ戌時ノ大地震、(中略)更ニ占吉凶之道ヨリ以来、此程ノ勝事候ハズ」ト奏ケレバ(中略)仏法、王法共二傾キ、世ハ只今ニ失候ナムズ。

(二本・二四「大地震事」)

との一節が載っている。『勝事記』成立の二年後の『明月記』嘉禄二年(一二三六)十二月二十五日条に、

……甚だ遺恨の事なり。實に是れ御一門の瑕瑾か。左府、兵杖を申さると云々。世間の勝事。尽くる期有るべからざるか。地震又甚し。不吉に鳴動する事。聞く毎に恐怖。……

とあり、施線の「大地震」・圈点の「勝事」そして二重施線部の意味の同質性が看取される。延慶本の描き方と日録との文章の書きぶりが呼応しており、日録には「勝事」の語彙が嵌入されているので『勝事記』成立に関与する定家を推定していくうえで意味深長に響く。

【末尾】

註

- [1] 拙著「第七章 治承物語と西山の空間」(『愚管抄の言語空間』汲古書院・二〇一四年)
- [2] 拙稿「『平家物語』初期生成と藤原定家——編纂の視点から——」(上)(下)、『熊本学園大学 文学・言語学論集』第
五・五二号・二〇一九年二月・二〇二〇年六月
- [3] 弓削繁『六代勝事記・五代帝王物語』三弥井書店・二〇〇〇年) 頭注一五そして補注四
- [4] 「第一章 第二節「作者と成立事情」」(『六代勝事記の成立と展開』風間書房・二〇〇三年) 四五ページ
- [5] 「第二篇 六代勝事記新註」(高橋貞一『国文学論集 古稀記念』思文閣出版・一九八四年) 二八八〜九〇ページ
- [6] 「六代勝事記私注(二)」(『藤女子大学国文学雑誌』第五一号・一九九三年十一月)
- [7] 「三 4 承久の乱以後の藤原定家——『明月記』を読む」(『藤原定家とその時代』岩波書店・一九九四年) 二八二ページ・
二八四ページ
- [8] 註「3」の同書の①・②・③の各部分の頭注そして同書補注の二二六
- [9] 註「4」の同書「第一章 第三節「作者説の展開」 七一ページ
- [10] 註「4」の同書「第一章 第二節「作者と成立事情」 三六ページ・三八ページ
- [11] 註「4」の同書「第一章 第四節「構想と表現」 七六〜七七ページ
- [12] 註「4」の同書「第一章 第二章「作者と成立事情」 三二ページ
- [13] 註「7」の同書「二 6 慈光寺本「承久記」とその周辺」
- [14] 拙著「第九章 皇帝年代記の書き継ぎについて」(『愚管抄の創成と方法』汲古書院・二〇〇四年)・拙著「第Ⅱ部 愚管抄と治
承物語の空間」(『愚管抄の言語空間』汲古書院・二〇一四年)
- [15] 註「14」の『愚管抄の創成と方法』の「第九章 皇帝年代記の書き継ぎについて」
- [16] 道理から「愚管抄」別帖の跋文に及ばせる直前で後鳥羽院を「不可思議ノ君ノ御運、御案ノメデタサト、心アル人ハコレヲノ
ミメデタクゾオモヒタリケル。」(巻六——三一七ページ)としている。『岩波古語辞典』の「うるはし」の語彙の項に、漢文訓
読体の意味をひいており、「相手を賞賛したり、儀式ばったりする」との意味も当時はあったとの説明がある。
- [17] 註「1」の同書「第九章 再編された六卷本治承物語と九条道家」
- [18] 註「14」の『愚管抄の創成と方法』の「第七章 撰閲家の発展」・註「1」の同書「第Ⅱ部 第九章」
- [19] 註「15」の同書「第八章 付録の文章について」
- [20] 註「15」の同書「第九章 皇帝年代記の書き継ぎについて」

〔21〕 註〔3〕の同書 補注一七七

〔22〕 註〔5〕と同じ。

〔23〕 註〔6〕の同論文

〔24〕 註〔7〕と同じ。

〔25〕 註〔20〕と同じ。

〔26〕 富倉徳次郎著『平家物語全注釈 上巻』（角川書店・一九九六年）二三四～三五ページ

〔27〕 註〔2〕と同じ。

〔28〕 第二章 平家物語の成長（『平家物語研究』角川書店・一九六四年）一七五ページ

〔29〕 註〔1〕の同書「第八章 治承物語」の復元

〔30〕 註〔1〕の同書「第Ⅱ部 愚管抄と治承物語の誕生」

〔31〕 註〔2〕と同じ。

〔32〕 長村祥知「後鳥羽院政期の在京武士と院権力——西面再考——」（『鎌倉時代の権力と制度』思文閣出版・二〇〇八年）

〔引用資料の典拠〕

『愚管抄』・『伊勢物語』は『日本古典文学大系』（岩波書店）、『六代勝事記』は『六代勝事記・五代帝王物語』（三弥井書店）、定家の歌は『藤原定家全歌集』（筑摩書房）、慈円の歌は『拾玉集』（明治書院）、『新古今和歌集』は『日本古典文学全集』（小学館）、『明月記』は『訓読 明月記』（河出書房新社）、『吾妻鏡』は『全釋 吾妻鏡』（新人物往来社）、延慶本『平家物語』は『校訂延慶本平家物語』（汲古書院）、屋代本『平家物語』は『屋代本高野本対照・平家物語』（新典社）、寛一本『平家物語』は『新日本古典文学大系』（岩波書店）、『源平盛衰記』は『中世の文学』（三弥井書店）、『百鍊抄』・『山槐記』は『新訂増補 国史大系』（吉川弘文館）、『源氏物語』は『新潮日本古典集成』（新潮社）。